

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：15101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23792646

研究課題名(和文)効果的な低身長小児への外来支援：コーピングの防御因子と脆弱因子の解析

研究課題名(英文)Effective support for children with short stature : analysis of protective and vulnerable factors of stress-coping

研究代表者

西村 直子 (NISHIMURA, Naoko)

鳥取大学・医学部・助教

研究者番号：30548714

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：低身長外来に通う低身長児(者)の身長に関するストレス、身長に関するストレスへの認知、コーピングとそれに関連する要因ならびに心理社会的適応の実態について調査した。その結果、身長に関するストレス、特に身体不快感が高いが、それに対して、影響性は強く感じておらず、自己概念は損なわれていなかった。さらにセルフエフィカシーが非常に高かった。両親の治療に対する思いの中で「治療が終了した後の将来への不安がある」と保護者が答えた場合、小児の自己概念は低かった。低身長児の心理社会的適応には、心理社会指標の中でも「セルフエフィカシー」が関連していることが示唆され、また保護者の不安も影響を与えうる因子だと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to assess psychosocial profiles of children with short stature. Children with short stature experienced a number of exposures to short stature-related stressors. However, there was no evidence of impaired psychosocial status. Surprisingly, children with the disease did not perceive short stature-related experience as a threat. Furthermore, self-efficacy was quite high. When parents were anxious about therapy, their children had lower self-concept. It is vital in the future to systematically evaluate the entire psychological adaptation process that shapes the psychosocial status of children with short stature, and that health professionals perform evaluations that allow them to promote healthy psychosocial adaptation.

研究分野：生涯発達看護学

科研費の分科・細目：小児看護学

キーワード：ストレス 低身長 心理社会的適応

1. 研究開始当初の背景

低身長への治療に関して、2008年からSGA性低身長症に成長ホルモンの使用が承認となったことを受け、今後、成長ホルモン療法を受ける小児は増加することが予想される。しかし、たとえ成長ホルモン療法を受けても、最終身長が平均に届かないこともあり、治療の有無にかかわらず、低身長児(者)が身長が低いことで長期間の受けるストレスを心理的な問題として捉える必要があるが、低身長児の心理的サポートについては一定の指針がないのが現状だ。

これまでの低身長児に関する研究では、低身長児(者)のQOLに関しての一定した見解が得られていない。Noekerらは低身長児の適応プロセスや精神衛生状態を保つために「防御因子」や「脆弱因子」が大きく関与していると述べている(2000)。つまり、低身長児のコーピングの影響要因を明確にすることが、援助する上で非常に重要であるといえるが、QOLに影響を及ぼす心理社会的要因についてはよく知られていない。また、保護者への質問調査で、保護者自身も悩みをかかえており、サポートを必要としていることが明らかとなったが(西村ら、2010)、保護者の認識を考慮したうえでの調査は国内外でも希少である。これらの結果から、保護者の心理の影響を考慮した上で、低身長児自身が認識するコーピングと「防御因子」「脆弱因子」の実態を明らかにすることが、低身長児への効果的な外来支援に必要であると考えた。

2. 研究目的

本研究は、低身長児の心理社会的適応を促進するために、身長が低いことでどのようなストレスを感じているか、コーピングプロセスの「防御因子」「脆弱因子」は何かを明らかにすることである。

(1) 低身長児と健常小児の低身長ストレッ

サー、学校ストレッサー、低身長ストレッサーの認知的評価、コーピング、セルフエフィカシー、ソーシャルサポート、自己概念、ストレス反応の得点を比較し、低身長児の心理社会的指標の特徴を明らかにする。

(2) 低身長児の各心理社会指標の関連を検証し、コーピングプロセスの「防御因子」「脆弱因子」を明らかにする。

(3) 保護者の治療などに対する認識の小児の心理社会的適応への影響を検討する。

(4) 得られた結果から具体的な介入方法について検討する。

3. 研究方法

(1) 低身長を主訴に外来を受診した8~18歳の小児(者)を対象とした。

患児には低身長ストレッサー(低身長に関連する経験)、学校ストレッサー、の認知的評価、コーピング、セルフエフィカシー、ソーシャルサポート、自己概念、ストレス反応について自記式質問紙への回答を求めた。

保護者には基本的情報である、小児の年齢、性別、身長、体重、生年月、成長ホルモン療法の有無、身長の高い年下の兄弟の有無について回答を求めた。

各指標の下位尺度の素点を、健常小児集団の平均と標準偏差をもとにzスコアに換算した。この下位尺度zスコアの指標内での平均値をその指標の代表値として分析に用いた。

4. 研究成果

(1) 67名に配布し25名より有効回答を得た(回収率37%)。対象者の属性は表1に示すとおりである。年齢は8~18歳で平均12.9歳(SD=2.9)であった。身長SDスコアは平均 -3.0 ± 0.7 ($-4.7 \sim -1.2$)であった。男女の間に成長ホルモン療法の有無、合併症の有無、身長の高い年下の兄弟の有無に違いはみられなかった。

(2) 低身長児の心理社会指標の特徴

低身長児の"低身長ストレス"について、下位尺度のひとつである"身体的不便さ"のzスコアは、2.0であり、健常小児と比較して有意に高値であった。このように、低身長児は"低身長に関連した経験"をより多く体験していた。それに もかかわらず、彼らがその体験の"認知的評価"を通じて感じる体験の"影響性"と"コントロール性"は、健常小児のそれと変わりがなく(zスコア：-0.5, 0.5)、さらに、適応指標とされている"自己概念"や"ストレス反応"も健常集団と変わらなかった(zスコア：0.2, 0.1)。特徴的な結果としては、低身長児の"セルフエフィカシー"のzスコアは3.4と健常集団より有意に高かったことである。

(3) 本研究で調査した変数同士の関連

適応指標である"自己概念"は、"学校ストレス"と負の相関を示し($r = -0.611, p < 0.01$) "体験の認知的評価を通じて感じるコントロール性"、"セルフエフィカシー"と正の相関を示した($r = 0.538, p < 0.01, r = 0.594, p < 0.01$)。同じく適応指標である"ストレス反応"は、"セルフエフィカシー"と負の相関を示し($r = -0.463, p < 0.05$) "学校ストレス"と正の相関を示した($r = 0.646, p < 0.01$)。年齢、性別、身長zスコア、コーピングは、これらの適応指標との関連は認めなかった。

(4) 保護者の認識と小児の心理社会的適応への影響

両親の治療に対する思いと小児の心理社会的適応との関連について検討した。現在治療中であることに関しての不安の有無で小児の心理的適応の違いはなかったが、治療を終了した後の将来への不安があると保護者が答えた場合、小児の自己概念は低かった。父親自身の身長満足度と小児の心理社会的適応に違いはなかったが、母親の身長満足度が低いと小児の認知評価の影響性は高かつ

た。両親が現在不安に感じていることは「薬の副作用」が40%と最も多く(図1)、現在の薬の副作用より「将来どのような副作用ができるか」への不安をより感じていた。

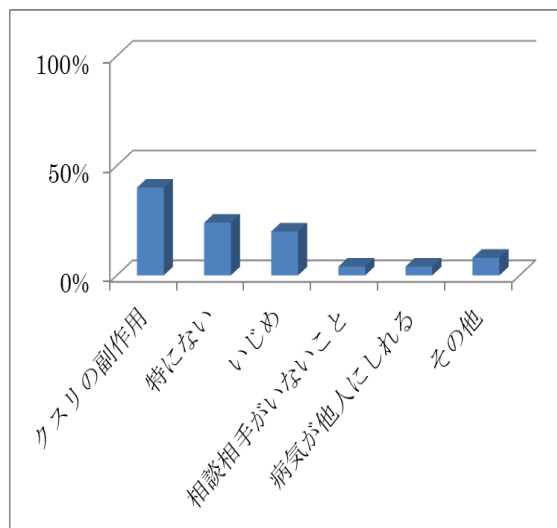


図1 現在不安なことについて

受診の際に一番説明してほしいのは「今後の治療方針」(45%)や「治療終了後の患者の現在」(12.5%)であった(図2)。

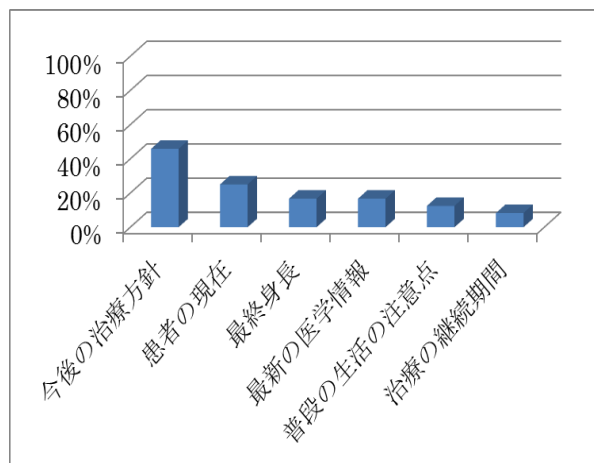


図2 受診の際に説明してほしい内容

保護者の96%が情報源を「医師」のみであると回答しており(図3) 保護者の不安の有無で小児の自己概念に違いがみられたため、外来受診時に保護者の抱える不安を緩和するかかわりの必要性が示唆された。

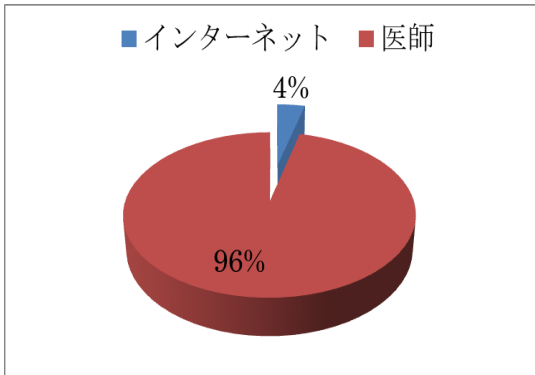


図3 治療についての情報源

(5) 成果のまとめ

低身長児は低身長に関する経験のなかで"身体的不便さ"を頻繁に感じていた。それにもかかわらず適応指標である自己概念やストレス反応は正常身長児と変わらなかった。また、"体験の認知的評価を通じて感じる"影響性"や"コントロール性"の得点も正常身長児と変わらなかった。さらに、セルフエフィカシーが正常身長児と比較し非常に高く、適応指標である自己概念やストレス反応と高い関連があった。以上の結果から、低身長児の心理社会的適応には、心理社会指標のなかでも「認知評価(コントロール性)」と「セルフエフィカシー」が関連していることが示唆された。保護者が小児の治療終了後に不安を抱えていると小児の自己概念が低かったことから、保護者の不安も影響を与える因子だと考えられる。自身の外見に否定的な認識を持っていることが否定的な自尊感情や心理的な不適応につながりやすいと言われている。低身長を持つ小児が受診する際に、接する機会が多い看護師が、認知的評価やセルフエフィカシーを重視した心理的アセスメントを実施する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計1件)

西村直子、遠藤有里、南前恵子、田中敏章、有阪治、花木啓一、低身長児(者)の心理社会的適応 コーピングスタイルと関連因子の影響について 第60回日本小児保健協会学術集会、2013、9月28日、国立オリンピック記念青少年総合センター

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西村直子 (Naoko NISHIMURA)
鳥取大学・医学部・助教